

アフリカの人々と名付け 30

キリスト教のアフリカ化と祖霊名

小馬 徹

アフリカ独立教会の創造性

周知の通り、アフリカ各国には聖書の再解釈に依拠する様々な独立教会が簇生し、各々独自の発展を遂げてきた。確かに、祖霊を初めとする在来信仰の諸要素を取り入れた例も少なくない。だが、その事実を単純に「習合」と呼んで片付ける事は、安易な思考停止に繋がる。

アフリカ大陸は、その全体が、植民地化以来きわめて根源的な次元で急激な社会変化を経験してきた。幾多の独立教会運動は、その社会状況に対処しようとするアフリカ各地の人々の死活を賭けた試みであり、だからこそ固有のラディカルな信仰形態が模索されたのである。

我々がアフリカで目にするのは、決して上辺だけのキリスト教ではなく、むしろ今世界で最も熱く、創造的な活動を繰り広げているキリスト教運動なのだと気付くべきなのだ。

キリスト教の拡大と変成

独立教会を簇生させるのは、いかなる宗教も決して真空の中にではなく、長い固有の社会・文化的伝統の中に移植されるという、単純な事実である。ヨーロッパなどのキリスト教の聖人信仰、中でも南欧やメソ・アメリカのマリア信仰は、ヘブライ的なキリスト教信仰とは余程異質である。それが「異端」的な解釈やキリスト教以前の土着信仰に根ざす事は、明白だろう。

アフリカでも、本質において、事情は異ならない。人間は、昆虫の蛹のように古い自己を跡形もなく溶解して、蟬や蝶へと脱皮できはしない。だから人々は、文化の内在性や生の条件を無視した脱状況的なキリスト教ミッションの教義に独善を見て、時に離反し、あるいは激しく敵対して来た。アフリカの独立教会は、伝統的

な価値観を内面化した自己のあり方や具体的な個々の生存条件を直視しつつ、なお且つ聖書の解釈を通じて新しい状況を生きる自己の再創造を目指す、必然的な運動としてあるのだ。

信仰と伝統のインターフェイス

リンハートは、スーダンのディンカでは、洗礼名が系譜上は全く余分だと言う。なぜなら、それは当人が祖先のほとんど知らない世界に部分的に同化している事を示す反面、ディンカ人としての個人史や社会的人格の他の側面を何も伝えないからだ [Lienhardt, G., "Some African Personal Names", *JASO* (19) 2, 1988]。

この事態はほぼそのままアフリカ全体に当てはまる、と前回述べた。だがより正確には、何処でもそのような状況が出発点となると言うべきだろう。くどいようだが、世界の何処でも、またキリスト教に限らず、新たな宗教の受容とは、変化する社会状況に対処する試みの一つである。逆に言えば、それは全く同じ目的のために伝統的な価値の一部、例えば妖術や邪術でさえもが求められ、あるいは再定義されて活用され得る状況でもあるのだ。だから、伝統的な価値観と新たな宗教の理念や価値観とは絶えず相互に参照され、そのインターフェースの調整が常に問題となるのである。

一つの方向は、伝導団が伝統的な価値観に歩み寄ることだ。カソリック教や正教は、複婚制や婚資慣行、飲酒慣行などに寛容であり、他の宗派に比べると何処でも速やかに浸透する傾向が見られる。氏族外婚制は、氏族同士が政治的同盟関係を結んで民族を統合する機能を持ち、複婚制はアフリカのどの民族でも構造的な前提だった。また、ビールは主要な交換財であり、

様々な儀礼や社交の機会には不可欠のものであった。カソリック教や正教は、諸民族の社会的な基盤を急激に脅かす事を避けた。

一方、それらに批判的なプロテスタント諸派の信仰と生活規範は、結果的にアフリカ女性の解放に繋がる側面を持ち、まず女性から広がる傾向が強い。例えば、南西ケニアのルイア人の一支民族で農耕民であるティリキ人の場合、1932年以来女性が大半してフレンズ教会に加盟した。それは、同年、キリスト教に改宗した女性が夫のために伝統的なビールを醸造する事を行政首長が禁じ、女性が日常の最大の労苦から解放されたからだ。こうした場合、新たな社会状況における伝統的価値の再解釈は、より根源的なものになる。無論、名前も例外ではない。

信仰、名前、社会

西南ケニアの農牧民キブシギスを例に取ろう。米国南部系のプロテスタント諸派の連合体(African Gospel Church; AGC)は既に1935年から伝導を始めていたが、伝統的な価値には常に批判的で、新来のカソリック教がやがて主流となった。独立教会は、議長解任を巡る紛争から1964年にAGCと袂を分かったAfrican Gospel Unity Churchという小会派があるだけである。

キブシギスでも、個人の名前は欧米風のファースト・ネームと父称の組み合わせで政府に登録される。ただ、よりよく氏名を同定する場合には、幾つかの幼名の内、誕生の状況に因む「粥名」をミドル・ネームのように用いる方式が既に定着している。混乱はやはりプロテスタントの側に生じた。最も大切で、秘匿すべき幼名とされる祖霊名が問題となったのである。

キブシギスでは、赤ん坊の誕生直後、氏族の女性たちが赤ん坊と同性の先祖の名前を次々に唱える。赤ん坊が^{くしめ}噎をした時に名前を呼ばれていた祖先が魂として再来したとされ、その名前が赤ん坊の祖霊名となる。この名前は、ごく近い親族の間でだけ知られ、他には秘される。子供は、祖霊名でなく、話者とその子の魂と

なるとされる祖先との親族関係に則して、「お父さん」、「お祖父さん」と呼び掛けられる。

泣いた時、笑った時、声を出した時など、同定方法の細部に多少の変異はあるが、アフリカには類似の命名慣行が多い。これらは、名前が生命の一部であるとする観念に基づく慣行であり、氏族の系譜的な連続性という、単系出自社会の最も根源的なイデオロギーを演劇的に表出する儀礼的な行為なのである。

20年近く前、或るプロテスタント信徒の女性が、赤ん坊に祖霊名を与えなかった。やがて、赤ん坊の足が萎えて変形し始めた。病院の治療も無効だと分かった時、彼女は次々子供に祖霊名を与えた。自分の名前を子供に与えられるべき祖霊の怒りが子供の不幸の原因だとする、夫の氏族や世間の解釈に屈伏したのだが、子供は劇的なほど速やかに健康を取り戻した。同様の例を幾つか聞く。それらは、現代の社会状況を巡るキリスト教の価値と伝統的な価値との間の葛藤が社会劇として展開された好例である。

こうして、祖霊名の慣行は守られた。牧畜民の近代化の典型だとされるキブシギスでも、父系氏族社会の原理は未だに社会を構造化して統合する根幹であり、いかなる新たな信仰もそれを見捨てては成り立ち難いからである。

特に、キブシギス人は生物学的な実子と他の子供を区別せず、妻の産んだ全ての子供を、更には妻の連れ子さえも自分の子供として進んで認知して来た。子供は氏族が永続する礎であり、また自分の魂が再生する孫を作ってくれる存在であり、何よりも貴重な「財産」とされて来たからである。生物学的な父性を問題にしないキブシギス人にとって、父子の一体性を保証するのは子供の祖霊名である。つまり、祖霊名を与える事は氏族の統合にとって不可欠の要素であり、その最も有効な文化表象だったのである。

キブシギスでは、この意味で、近代化はまだ閾値を越えていないと言えるかも知れない。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)